P-083

保育所における0歳から2歳の食物アレルギー児への誤配誤食によるアナフィラキシー予防対応の困難と課題

遠藤　幸子[1]、大西　文子[2]
[1]日本赤十字豊田看護大学
[2]元日本赤十字豊田看護大学

【目的】
保育所における0歳～2歳のFA児に対して、誤配誤食予防対応を実施する上での困難や課題を明らかにする。
【方法】
研究期間：2022年4月～ 2022年10月
調査方法：A県内の公立認可保育所に勤務する園長5名、保育士5名、看護師5名、調理員5名を職種ごとに4グループに編成し、各職種で1回ずつFGIを実施した。インタビュー内容：0歳～2歳のFA児の誤配誤食予防対応における困難や課題はどのようなものか。分析方法：保育現場の状況に応じたリアリティのある具体的な対応方法を抽出するため、システム理論を活用し、一次分析・二次分析・複合分析を実施した。
【結果】
以下に【　】はストーリー場面、≪　≫は重要カテゴリーとして説明する。
園長、保育士、看護師から【人的環境と徹底した安全確保への困難と課題】は、≪勤務体制が異なることによる給食時の人員不足への課題≫、【保護者へのアレルギー対応に関する相互理解の困難】では≪保護者からのアレルギー情報提供の不徹底≫や≪保護者とのアレルギー対応に対する認識の相違≫があった。保育士は、≪アレルギー症状の出現やアナフィラキシーに対する恐怖や対応への負担≫≪安全確保を重視したマニュアル作成への負担≫等の【保育士の負担】があった。調理員は、【調理環境におけるコンタミネーションの危険性】や【制限時間内での調理工程の困難】を課題とし、≪発注の心理的負担≫等【調理員の負担】があった。また、【誤食・ヒヤリハットが起きやすい要因】では、保育士や看護師からは≪0歳から2歳の行動特性、認知機能の発達による誤食の危険≫があった。
【考察】
人的環境と徹底した安全確保では、アレルギー対応把握が困難な時期や、勤務体制における給食時の人員不足による困難が明らかとなった。0歳～2歳の行動特性、認知機能の発達による誤食の危険は、FA児に限らず、新規発症の可能性もある他園児も含めて誤配誤食予防のための環境確保及び安全管理に困難があり、FA対応における人材確保や環境整備が必要不可欠であることが示唆された。また、保育士は安全確保を重視したマニュアル作成への負担があり、調理員は制限時間内での調理工程の困難や食材発注の心理的負担があった。0歳～2歳のFA児の誤配誤食予防対応において、全職種共通した困難や課題及び各職種特有の困難や課題の特徴が明らかとなった。

P-084

保育所における0歳から2歳の食物アレルギー児への誤配誤食によるアナフィラキシー予防を意識した実践

遠藤　幸子[1]、大西　文子[2]
[1]日本赤十字豊田看護大学
[2]元日本赤十字豊田看護大学

【目的】
保育所における0歳～2歳のFA(Food Allergy;以下 FA)児に対する発達段階や行動特性の特徴を踏まえた誤配誤食予防の工夫や実践内容を明らかにする。
【方法】
研究期間：2022年4月～ 2022年10月
調査方法：A県内の公立認可保育所の0歳～2歳児を保育している保育所に勤務する園長5名、保育士5名、看護師5名、調理員5名を職種ごとに4グループに編成し、各職種で1回ずつFocus Group Interviewを実施した。インタビュー内容：0歳～2歳のFA児の誤配誤食予防のため、どのようなことを実施しているか。分析方法：保育現場の状況に応じたリアリティのある具体的な対応方法を抽出するため、システム理論を活用し、一次分析・二次分析・複合分析を実施した。
【結果】
研究参加者のFA児対応の経験年数は、園長は4年～15年、保育士は3年～4年、看護師は3年～10年以上、調理員は1年～10年であった。以下に【　】はストーリー場面、≪　≫は重要カテゴリーとして説明する。
【安全を重視した給食提供】では、4職種は≪保護者と複数の職員による献立確認≫や≪全職員による個別のアレルギー情報共有の徹底≫≪離乳食との区別を明確にした調理≫に心がけていた。また、【0歳から2歳児の行動特性に応じた誤食予防】では≪誤食を起こしやすい行動特性≫を捉え、≪発達に応じた給食環境の確保≫に努めていた。【マニュアル作成と活用】では、≪各園の個別対応マニュアルに対して職員・保護者の共通理解≫を重要と捉え、≪園独自のアレルギー対応マニュアル作成とその活用≫をしていた。【調理員の業務分担】は、調理員は≪離乳食やアレルギー除去食を含む調理業務の役割分担≫を行い、【安全な調理過程の工夫と徹底】として≪調理過程から食事提供までの安全確保≫に努めていた。
【考察】
4職種は共通して、安全を重視した給食提供の徹底に心がけ、職員・保護者間の共通理解の重要性を認識し、マニュアル作成し活用していた。0歳から2歳児の行動特性に応じた誤食予防では、FA児のみならず他園児の行動特性、認知機能の発達を考慮した工夫や実践が明らかとなった。システム理論を活用した分析により、FA児対応として各職種の専門的役割や具体的な実施内容及び保護者、主治医、職種間との連携の実際が示唆された。

Presented by Medical*Online